

## メルボルン大学の家畜生産生理研究者一行が来訪

7月17日（月・祝）～22日（土）の間、メルボルン大学理学研究院からロビン・ワーナー教授、クリスティ・ディジアコモ上級講師、スリンダー・チャウハン上級講師・農学系国際担当教員の3名が北海道大学を訪問しました。両大学は、長年にわたる感染症及びナノ材料研究連携をもとに、2021年末から全学的な連携強化を図っており、昨年立ち上げたマッチングファンドの採択案件の一つとして「北大・メルボルン大合同ワークショップ：健やかな惑星のための高品質食料生産に繋がる持続可能な家畜生産」が開催されました。ワークショップに合わせ、当初渡日予定であったディスティングイッシュト・プロフェッサーのフランク・ダンシア教授が、米国動物学会連合（FASS）から今年の「家畜栄養に係る新境地開拓賞」を受賞するという嬉しいニュースもありました。

野口 伸農学研究院長の挨拶で始まったワークショップにおいては、ダン

シア教授から「抗酸化物質と植物由来ポリフェノールによる家畜の健康と生産性向上の可能性」が、授与式に同行するジェレミー・コットレル上級講師から「熱性ストレスの生物学と栄養改善戦略」、ワーナー教授から「生産肉の品質を決定づける野火、筋肉構造、繊維質」、ディジアコモ上級講師から「持続可能な食料生産における小型反芻動物の役割」、チャウハン上級講師・農学系国際担当教員から「動物生産の持続可能性における遺伝育種学の役割」が紹介されました。北海道大学からは、北方生物圏フィールド科学センターの後藤貴文教授から「牧草で育てる和牛の可能性と牛肉生産におけるエピジェネティクスの応用」、農学研究院の高橋昌志教授から「牛の妊娠早期発見のための新たなアプローチ」、若松純一准教授から「行動的温熱感覚文責を活用した、マウスの食後の温熱感覚に対する異なる肉種とその割合における影響」、内田義崇准教授から「北海道の

酪農システムとその栄養管理戦略」、小池 聡教授から「反芻動物の生産改善のためのルーメン微生物叢の探索」が説明されました。日本の防疫規制に伴い滞在中の牧場入場は適わないものの、十勝清水のコスモスファーム、白老の敷島ファームからの和牛生産者がワークショップに参加し、それぞれの牧場の様子を語りました。

研究者たちは、北海道大学のスマート農業教育研究センター、モデルバーン等関連施設を見学し、また、雪印メグミルク株式会社やサツラク農業協同組合の工場見学に繰り出しました。今後も研究者同士の連携を強固なものとし、大学院生の双方向研究インターシップに繋がられないかと話が弾みました。地球温暖化に伴い、家畜生産は世界的に新たなステージに入っており、両学の連携が期待されます。

（北方生物圏フィールド科学センター、農学研究院、国際連携機構）



ワークショップでの集合写真



ワークショップの様子



国際食資源学院長との面会



スマート農業教育研究センター見学の様子